



博士（人間科学）学位論文 概要書

# 象徴的支配における文化的抵抗

## Cultural Resistances in Symbolic Domination

2004年1月

早稲田大学大学院人間科学研究科

笠間 千浪

KASAMA, Chinami

本論は、権力／支配の問題圏域が物質的次元のみにとどまらないことに着目し、象徴的次元が深く関与していることに重きをおく視座にたつ。ここでいう象徴的次元とは、単なる心理的要因ではなく、ある社会の状態の正当性が成立される局面で構築され、行使され、内面化され、自明なものとして秩序化する過程に絶えず関与している非物質的次元のものである。

とりわけ本論では、当該社会において社会的／歴史的に形成された序列化を伴う差異／格差の関係（物質的・象徴的次元の諸資源の不平等配分）が、いかにして「当然／自然」化されていき、ついには自明視されるにいたるのかについてのメカニズムに着眼する。そのメカニズムが作動していると、あるカテゴリーにおいて劣位に有徴化された側は、人間としての象徴的な価値を減少させられてしまうが、それが「自然」「当然」として自明視されるのである。

そのようなメカニズムにおいて作動しているのは、権力／支配であるが、近代以降、そして現代は特にそのあり方は、それ以前のものとは比べると「不可視」化しているのが特徴である。もちろん、可視的で物理的暴力はなくなったわけではなく、むしろそれらは日常的領域におけるミクロな網状組織のように張り巡らされた「不可視」の権力／支配と深く連動しているのである。

本論では、非経済的要因の近現代的カテゴリーであるジェンダー、「人種」、エスニシティなどを「不可視」の権力／支配が作動する軸であることを射程に入れながらも、特にジェンダーの軸を主題化する。それゆえ本論は、ジェンダー研究の一環としての性格を持つ。

方法論的には、不可視の権力／支配メカニズムをP. ブルデューの象徴的支配論とM. フーコーの権力分析を主に再構成しながら援用する。なぜならば、両者の研究主題が、潜在的な権力／支配の不可視の構造を解析しようとする点で共通しているからである。また、両者の視座は、日常的世界における慣習行動の領域や身体的次元に浸透して主体形成の局面まで作用する権力／支配に焦点をあわせ

ているので、ジェンダー秩序の権力／支配における不可視性を解明するのに欠かせないからである。

象徴的支配に対して社会的な回路を通じて抵抗するということは、大変な困難がともなっている。したがって、現在の権力／支配への抵抗形態は、政治的法的次元への可視的な反対運動（デモ行進や明確な糾弾行動など）以外の形をとる可能性は強く、多様化していると考えるべきである。

本論では、抵抗の契機が推測される日常的な文化的実践の場／空間の具体例を分析することによって、象徴的支配を逆照射するような手法をとる。そこでは、抵抗形態の潜在化ないし多様化の一面が理解できるが、逆に象徴的支配の根強さや複雑さも再認することにもなる。しかし、同時に抵抗の契機である新しい主体性の萌芽も、そこで育まれる可能性も存在するのである。

本論は、三部構成をとっている。第一部は、社会学を中心とした社会・人文科学において象徴的領域である「文化」が、しだいに主題化してくる現象（「文化的転回」）について、そこでのプロブレマティークを考察する。

第1章では、文化概念の系譜と「文化的転回」以降の新しい文化概念について検討する。第2章は、なぜ文化領域の研究が増加してきたのかについての背景について探る。まず、「消費」行為の象徴的次元が卓越化の手段である文化現象としてみなす視角が提出され、人間の生活が物質的な次元だけでなく象徴的な意味づけにも著しく依拠していることが再発見される。すなわち、卓越化の手段は物質的次元のみに依拠していないのである。そして、近現代の消費も、基本的にその消費の性格を備えているが、同時に資本主義の高度化による近現代メディア装置の発展によって、表象／イメージが重要な戦略として採用されると、象徴的領域は日常生活に深い影響を及ぼすようになる。また、「文化的転回」の背後における認識論的な変容も文化への研究を促進することにもなっている。

第3章は、文化／象徴的次元と権力を関連させながら考察した研究の系譜をた

どる。そこでも、文化を均質的・固定的なものにとらえる見方から、ヘゲモニーの「アリーナ」のような場／空間としてみなす見方が優勢になってくる変遷がある。

第二部は、被支配側が意図せずにその支配に荷担してしまうほど、当該社会の秩序の正当性を誤認（＝承認）しており、自分の抑圧を誘導してしまうような不可視の権力／支配である「象徴的支配」のメカニズムについて、フーコーとブルデューの所論を援用しつつ、分析する。

第三部は、象徴的支配における抵抗形態は、日常的な文化実践のなかで行なわれる可能性が高く、しかも拡散し、断片化、多様化する傾向にあることを検討する。具体例として、女性によるサブカルチャーを検討しながら、抵抗の困難性と萌芽性の両面を分析する。そして、このサブカルチャーが逆照射している現行のジェンダー秩序の素描を試みる。